

Title	弔詞
Sub Title	A massage of condolence
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.7/8 (1964. 8) ,p.526(6)- 527(7)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小島栄次教授追悼特集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640801-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

弔 詞

慶応義塾長 高 村 象 平

小島栄次君は去る十月二十六日病をもって逝されました。まだ六十三歳という年は学者としても社会人としても働き盛りと申すべき年であって、その意外な長逝は君を知る誰もが残念に思うところであります。

君との交遊は昭和四年経済学部助手として君と小高泰雄君と共に職を母校に奉じた時に始まります。その頃吾々三人は故堀江婦一教授の蔵書整理、ピグウ教授の「厚生経済学」の協同翻訳などで共に額を集めて互にいそしんだのですが、それらはまだ昨日のことのように鮮やかな印象となつて蘇つて来る思いがいたします。

爾来三十五年という長い歳月を通じての交遊の間に養われた君に対する印象を一言にしていえば、誠実の人と申すことであります。君は性格的に世に脚光を浴びるのを極度に嫌つた人でしたが、類い稀な君の誠実さは、折にふれ事に臨んで光りを表わさずにはおきませんでした。

いまその履歴を顧みるとき、常任理事、体育会理事、新聞研究室主任、普通部長、社会学研究科委員長、経済学部長、経済学研究科委員長等々の慶応義塾における行政上の要職を歴任されていることは、凡そ名利とか地位とかに最も恬淡な君としては自ら意外の感を抱くほどであらうかと察せられます。けれども君の誠実な人柄と職務への旺盛な責任感を知る人々は、云わず語らずのうちに君を書斎のなかに単なる学究の徒としてのみとどめなかつたと申すべきであります。

君の霊前で昔の思い出を語ることも古い友人のよしみとして許して下さい。吾々の助手時代のこと経済学部の若手教授、

助教授、助手たちの間で野球チーム「長老会」が結成されました。そのとき君のポジションは概ねの場合捕手というダイヤモンドの纏め役でしたが、それと並んで長老会の運営のための会計その他のやりくりをするいわばマネージャーの役割が振り当てられていました。縁の下の方というには余りにも顧みられない仕事でしたが、それをごく自然な形で引受けていたのが小島君、貴方でありました。

そういえば君が担当した経済地理学を志した動機にもそれに似た趣があります。この学問を塾で最初に手がけたのは故伊藤秀一教授でありましたが、教授の歿後経済地理の講座は空席となり、その後任者として君に白羽の矢が向けられたのでした。元来君がコロンビア大学で専攻したのは最低賃銀制の研究であり、経済地理は必ずしもその興味の対象ではなかったと聞いています。当時君はその去就に迷い、私にも意見を求められましたが、種々考慮の末この経済地理学というまことに地味な学問の研究に生涯を捧げる決意を固められたのであります。蓋し慶応義塾の将来のために誰かがこの講座を担当せねばならぬ以上、しかもそれがどちらかといえば陽の当らぬ貧乏籤であるのならば、この自分が引こうというのが君の処世の流儀でありました。

このような君の態度についてあるもどかしさを覚える人があるかも知れません。正直なところ私自身も時にはそれを感じたものでした。だがつきつめればそれが君の人柄というものでありましよう。吾々としては慶応義塾大学経済学部の輝かしい伝統の一頁に、誰よりも母校を愛することの深かった誠実そのものの人として温醇な中にいっく者とも申すべき操守の固い人として、小島栄次の名を記憶することによって在天の霊の平安を祈ろうとするものであります。

終りに小島君の積年の余慶が内助の功高き孝子夫人はじめ御遺族の上に豊かならんことを祈つてお別れの言葉といたします。

昭和三十八年十一月一日

弔 詞